

とが必要である。

- (2) 採血時に抗凝固剤と十分混和する
- (3) 自己血を採取することによって患者が本来の手術ができなくなるような状況にならないように、患者の年齢や合併症等を考慮する

### [3] インフォームド・コンセント(説明と同意)

自己血輸血の利点および不利な点を踏まえて、自己血輸血を輸血療法の全体像の中で説明しなければならない。患者またはその家族等に、以下の項目および患者からの質問事項について、分かりやすい言葉で説明した後に、文書による同意を得る必要がある。

説明項目：

- 1) 手術の際、一定量の出血が予測され、輸血を必要とする場合があること。
- 2) 輸血を行わない場合の代替療法とそのリスク。また、輸血を行わない場合手術に影響を及ぼすリスクがあること。
- 3) 輸血の選択肢としては、自己血輸血と同種血輸血があること。自己血輸血には、貯血式、希釈式、および回収式自己血輸血があること。
- 4) 同種血輸血によって、感染症伝播、輸血後移植片対宿主病(輸血後 GVHD)、輸血関連急性肺障害 (TRALI) および同種抗体産生による免疫学的副作用等を来すリスクがあること。
- 5) 同種血輸血による副作用を防止するために、自己血輸血を行うことによって同種血輸血を回避すること。
- 6) 自己血輸血のリスク
  - (1) 無理な貯血は心・脳血管系に合併症を起こしうること。
  - (2) 採血の際に血管迷走神経反射(VVR)が起こる場合があること。また、その場合、適切な対処をすること。[7]-6)を参照のこと。
  - (3) 貯血量が不足する場合は、同種血輸血を併用すること。
  - (4) 保存中にバッグが破損することもあり、細菌汚染が起こって使用不可能となる場合もありうること。その場合、手術を延期して再度貯血するか、または同種血を使用すること。
- 7) 必要量の自己血を貯血するには日時を要すること。
- 8) 貯血した自己血の一部または全部を、輸血する必要がなかった場合には廃棄すること。
- 9) 日本赤十字社血液センターに自己血の保管管理を依頼する場合があること。  
(施設ごとに対応は異なる)